

# オタモイ地蔵尊 樽商大研究者に同行

# 堂守不在2年 傷む地蔵堂

小樽市北西部のオタモイ海岸にあり、明治から昭和にかけて子宝地蔵としてあつた信仰を集めた「オタモイ地蔵尊」。遊歩道の崩落などで現在は参拝ルートはなく、2022年に地蔵尊がまつられている地蔵堂を管理する堂守が亡くなって以降、無人の状態が続いている。冬期間は積雪で近づけなかった現地に15日、地蔵尊の研究を続ける小樽商科大グローバル戦略推進センター客員研究員の高野宏康さん(50)の案内で、獣道をかき分けて向かった。



- ①倒壊した堂守の自宅と比べ、冬期間の雪のダメージは少なく残っていた地蔵堂  
②地蔵堂の中の祭壇に鎮座する本尊。傷みなどはなかった



最高気温23・9度と7月中旬並みの陽気となった同日午後1時半、オタモイ3の市道から山道に入った。事前に聞いた所要時間は約30分。実際、30分ほどで現地に着きはしたが、道中は崖伝い。滑落の危険を感じながら幅約50センチの「道なき道」を行

## 「あと何年持つか…」

く。つづら折りの急斜面を15分ほど進んだところで、高野さんが立ち止まる。「昨年秋に来た時と景色が全く違う」。倒木にツタが幾重も絡まり、行く手を阻む「壁」ができていた。のこぎりなどで抜け穴をつくり、ようやく目指す地蔵堂にたどり着いた。地蔵堂は天井の一部が腐食していたが、地蔵尊などは無事だった。高野さんは「堂守がいたころは雪下ろしなどをしてくれていたが、今はそれもない。あと何年、地蔵堂が持つか」と不安を漏らす。険しい山側からではなく、景観の開けた海側から地蔵堂へ向かうルートがつかれないか、今後検討するという。

地蔵堂内にはおよそ3千体の地蔵がまつられていた。一体一体の表情はそれぞれ異なり、背には氏名や住所が彫り込まれていた。天井からは「奉納」と書かれたあんどんがつり下がる。いずれも信者が寄進したもので、居住地は北見市や滝川市など各地に及び、子どもを授かりたいと、多くの人がオタモイに足を運んだ。往時の雰囲気を感じられた。堂守の村上洋一さんが亡くなるまで住んでいた木造2階建ての住宅は倒壊。一方で布団などは残されたままで、生活感が漂う。

オタモイ地蔵尊は、1889年(明治26年)ごろから子宝地蔵として信仰を集め、参拝者が訪れるようになった。最盛期の昭和初期には年間1万人近くに達し、観光地化。土産物の「地蔵せんべい」も登場し、人気を博したという。昨年6月には、新型コロナウイルスの感染拡大を理由に3年間休止していた例祭を、最寄りの駐車場に臨時の祭壇を設けて開催。地蔵尊は写真で代用した。関係者は今年も6月ごろに例祭を執り行う方向で準備を進めている。